法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

プロレタリヤ文学運動と反戦 : 黒島伝治をめぐって

高崎,隆治

(出版者 / Publisher) 法政大学国文学会 (雑誌名 / Journal or Publication Title) 日本文學誌要 (巻 / Volume) 17 (開始ページ / Start Page) 53 (終了ページ / End Page) 59 (発行年 / Year) 1967-03-23 (URL) https://doi.org/10.15002/00019183

プロレタリヤ文学運動と反戦

---黒島伝治をめぐって--

高 崎 隆 治

た。 プロレタリヤ文学には、意外なほどに反戦作品が少ない。むろのにかかわっていく闘士の革命的行為を、プロレタリアートないなたたかいの諸様相や、それらのたたかいに前衛として英雄的・献なたたかいの諸様相や、それらのたたかいに前衛として、強に、プロレタリヤ文学は、工場争議や小作争議を素材として、賃上げ・クロレが、小作料の減免・封建的人間関係の改善等々の、大衆的をたたかいの諸様相や、それらのたたかいに前衛として英雄的・献なたたかいの諸様相や、それらのたたかいに前衛として英雄的・献なたたかいの諸様相や、それらのたたかいに前衛として英雄的・献なたたかいの諸様相や、それらのたたかいに前衛として英雄的・献なたたかの諸様相や、それらのたたが、力量を表して、それらの作品が反戦・反軍と直接的に連関することはなかって、それらの作品が反戦・反軍と直接的に連関することはなかった。

ば、軍需工場のストライキが反戦をスローガンに掲げ得るように、く対立する反戦運動は、また階級闘争の一形態でもある。 たと え切り離して考えることは不可能であり、帝国主義侵略戦争にきびしいうまでもなく、帝国主義体制下において、階級闘争と反戦とを

て扱った、いわゆる反戦・反軍小説は、数多いプロレタリヤ文学作けれども、反戦または反軍ということを、直接の主題・素材としロレタリアート・農民の一切のたたかいは、広い意味で、必然的に天皇制ファシズムの支配下にある政治的・社会的現実において、プ

か。
文学運動にとって、まさに不可解なことと言うべきではないだろうた、そうしなければならない立場に立っていたはずのプロレタリヤこのことは、反戦を真向うから取上げることが可能でもあり、ま

品の中にもそうざらには見受けられない。

取圧迫に勝ること数等である。だとすれば、問題は自ら明瞭であろァシズムの罪状は、工場や農村における資本家・地主の非道なさくほど無数の人民大衆に無惨な犠牲を強いたことか、思えば天皇制フや酷無比な侵略戦争が、自国であると他国であるとを問わず、どれ中日戦争から太平洋戦争敗北に至るまでのあの長い凄惨を極めた

である。
るプロレタリヤ文学運動の主目標がおかれなければならなかったのるプロレタリヤ文学運動の主目標がおかれなければならなかったの範な人民戦線の結集による反戦闘争にこそ、変革への希求に密着すう。プロレタリアートを先頭とする農民・小市民・インテリ等の広

ことわっておくが、こういう問題を提起したからといって、反戦ということを主題としない作品の意義や価値を過少評価するものでということを主題としない作品の意義や価値を過少評価するものでということを主題としない作品の意義や価値を過少評価するものでということが急務であったにちがいない。それはそれでたしかに必要であったし、小林多喜二を持ち出すまでもなく、それらの作品に優れた側面を見出すことはたいして困難ではない。しいたげられている農民にとっては、地主の暴圧をは殺し、革命に立上る意欲と勇気を奮いたたせることが、プの座に据えられている労働者には、カク首反対や賃上げをたたかいとることが急務であったにちがいない。そして、彼等のそういったとることが急務であったにちがいない。そして、彼等のそういったとることが急務であったにちがいない。そして、彼等のそういった願望を組織し、革命に立上る意欲と勇気を奮いたせることが、プロレタリヤ文学の最も重要な課題の一つであったことも事実である。たしかに現実は、そういった暗黒と不安と恐怖に満ちていたのる。たしかに現実は、そういった暗黒と不安と恐怖に満ちていたのる。たしかに現実は、そういった暗黒と不安と恐怖に満ちていたのる。たしかに現実は、そういった暗黒と不安と恐怖に満ちていたのる。たしかに現実は、そういった暗黒と不安と恐怖に満ちていたのる。たしかに関する。

ことは許されなかったはずである。
を、反戦ぬきの単なるストライキ小説やオルグ小説の域にとどめるついて、何がより第一義であるかを熟考したなら、自らの文学運動者の眼をもって日本的現実を鋭く洞察し、前衛作家としての任務に内外の政治的経済的客観情勢の正確な分析と展望の上に立ち、文学内外の政治的経済的客観情勢の正確な分析と展望の上に立ち、文学内外の政治的経済的客観情勢の正確な分析と展望の上に立ち、文学

もちろん、「種まく人」以来、「文芸戦線」を経て「戦旗」、 そ

の後もおし進め、つき進めていかなかったのか。
して転向現象の起るまでのプロレタリヤ文学十余年の歴史の上で、して転向現象の起るまでのプロレタリヤ文学十余年の歴史の上で、の後もおし進め、つき進めていかなかったのか。

なのだが――「戦争に対する戦争」は、二七年テーゼの所産であることはたしか「戦争に対する戦争」は、二七年テーゼの所産であることはたしかを、文学者として主体的にどのように受けとめていたのだろうか。一一体これはどういうことなのか。彼等は、たとえば二七年テーゼー体これはどういうことなのか。彼等は、たとえば二七年テーゼ

本であるら、 一体どうしたことであるう。 かったことは、一体どうしたことであるう。 立、四・一六という弾圧の狂暴化を、侵略戦への準備段階と考えないような無力なコミニズムではなかったはずなのだ。二七年テーゼはなによりもそのことを明瞭に示している。にもかかわらず、反戦はなによりもそのことを明瞭に示している。にもかかわらず、反戦はなによりもそのことを明瞭に示して次に来るものが大陸への全面侵力である。

う形で結成された時、「反戦と平和」も同時に機関誌「文芸戦線」る。そして、プロレタリヤ文芸連盟が、一応それを受けついだといもっぱら反戦主義を最大の主眼に置いて創刊されたことは周知であ「種まく人」がクラルテ運動の日本における実践的適用として、

彼がナップに参加する以前に書かれている。だが、一口に反戦小説 に継承されたとみることができよう。反戦作家黒島伝治のいわゆる 義の勉強をしたということだが、蔵原は他の人々、つまり黒島・立 門を開いているわけではない。 る事実はこのことを裏書きする。) そして、その軍隊は誰れにでも 学が、たとえば野間・梅崎といった軍隊経験者によって書かれてい 軍隊経験がなければ、その作品化は不可能に近い。(戦後の戦争文 シベリヤ物の主要な部分はこの時期、つまり一九二六・七年から、 尉のはずだー 野・壺井等とちがって、おそらくプロレタリヤ文学陣営内にはほと 験を経てこそ、軍隊内部の矛盾も常識を越えた論理も、さらには陰 特殊な集団の特異な生活、それが軍隊である。その特殊な特異な体 んど例をみないと思われる一年志願兵——したがって彼は軍曹か少 ことで、たちまちに追い出された。蔵原惟人は在営中にマルクス主 惨な日常や残酷も生々と描き出すことが可能となる。 黒島 だが、果して問題はそれだけで片付くだろうか。 地に送られた唯一の人であったことも注目すべきことがらである。 島が、最も長い軍隊経験をもち、さらにはシベリヤ出兵に際して外 い。特に、それらの人々の中で、反戦作家の第一人者とみられる黒 あったことと、 反戦作品の量的な少なさとは決して無関係 で は な 越中谷・立野・壺井等、ごく少数の作家だけが如上の体験者で 般的な日常生活とは完全にしゃ断されたところで展開される 誤解をおそれずに言えば、それを創造する作家主体に ―という特権者であって、この場合らち外だろう)人 (壺井繁治は危険思想の持主という ではじじ

うシベリヤ物を書き、翌年には「橇」「渦巻ける鳥の群」を発表し黒島伝治は一九二六年に早くも「リャーリャとマルーシャ」とい

実に深く根ざしたものであるかを知ることができる。 等を書いて、反戦作家としての特異な存在となった。更に、一九二 に満ちた著述で、彼の反戦・反軍が、いかに彼にとって主体的な真が、これはプロレタリヤ英学における最初のまとまった反戦理論でが、これはプロレタリヤ芸術教程(1)に「反戦文学論」を執筆した が、これはプロレタリヤ芸術教程(1)に「反戦文学論」を執筆した に満ちた著述で、彼の反戦・反軍が、いかに彼にとって主体的な真 が、これはプロレタリヤ芸術教程(1)に「反戦文学論」を執筆した が、これはプロレタリヤ芸術教程(1)に「反戦文学論」を執筆した と言いて、反戦作家としての特異な存在となった。更に、一九二 に満ちた著述で、彼の反戦・反軍が、いかに彼にとって主体的な真 が、これはプロレタリヤ芸術教程(1)に「反戦文学論」を執筆した は、一九二

に注目する必要があるのではないだろうか。い」という抱負を語っているが、われわれは彼のこの時のこの言葉は「ここ数年間は主として戦争反対の思想・文学の宣伝につとめたところで、「反戦文学論」のあとがきの執筆者自伝の中で、黒島

前述の如く、二六年からこの年、つまり二九年まで、もっぱら反下がかく、黒島にとってこの発禁問題は一つの重大な曲り角を意味したがり、黒島にとってでなければ書かなかった黒島が、シベリヤ物とちがう未経験の場所と事件にまでつき進んだことに、彼のなみなみちがう未経験の場所と事件にまでつき進んだことに、彼のなみなみちがう未経験の場所と事件にまでつき進んだことに、彼のなみなみならの決意と意欲のほどがうかがわれるが、この作の出来ばえはともかく、黒島にとってこの発禁問題は一つの重大な曲り角を意味しもかく、黒島にとってこの発禁問題は一つの重大な曲り角を意味していた。

貧農出身の兵士であったことと関係する。将校でも下士官でもなか隊そのものであった。このことは、彼が工場労働者出身ではなく、家ではなく、ほかならぬ、天皇制国家権力の集中的表現としての軍日記」以来、彼にとって最も憎悪すべき敵は、階級敵としての資本思えば、一九一九年の入隊から、ひそかに書き続けられた「軍隊

ずれがあったというべきではないだろうか。 が、ラジカルな小市民インテリ出身の文学者たちのそれと、大きな もない貧農兵士(というより廃兵だろう)黒島の階級敵のイメージ れの政治的信念よりも芸術的信念によるもの」(山田清三郎=プロ レタリヤ文学史)というよりは、実は、インテリでも工場労働者で はずの前衛芸術家同盟に参加せず、文戦に踏み止まったのも、「か の基盤があった。プロ芸分裂の際、 に終始したのであった。彼の反戦・反軍はここにこそ必然的な出発 て、つまり、使用に耐えぬ兵としてようやく放免されるような酷使 前に、雪のシベリヤへ追いやられ、あげくのはてに、後年、 命を断つにいたった、当時においては不治とされた結核病者とな して人間的な権利・思考の一切をはく奪され、 った彼は、 日本軍隊においては当然のことながら牛馬以下の存 より階級的な立場に立っていた 指折り数えた除隊を 彼の生 在

うとした決意の表明であり対決の姿勢であった。 機として、敵の攻撃力のなみなみならぬ狂暴化に意識的に立ち向おとに前衛的反戦作家への道を探りつつ前進してきた彼が、発禁を契階級闘争の激発による彼の現実認識の深まりだけではない。一作ごしてナップへの参加という黒島の発展的コースの過程は、単純に、撃を与えずにはおかなかった。文戦脱退、文戦打倒同盟の結成、そ撃を与えずにはおかなかった。文戦脱退、文戦打倒同盟の結成、そ

いやおうなくおしつけられたことを知った。 だが、同時に彼は、この弾圧によって反戦文学発表の限界をも、

「戦争に対する戦争」から僅か二年の月日である。(くりかえすが、それはナップ結成の翌々年、一九三○年である)

かくして、「ここ数年間は」積極的にとり組むはずであった黒島

閉塞の憂目をみるわけである。の反戦は、そこから突破口を見出し得ないまま、後退し、やがて、

要」(反戦文学論)を黒島は力説強調したのであったが―― と表示の選年、作家同盟の中に農民文学研究会を組織し、「農民文学の発展」を書いたのはその証左でもある。さらに言えば、一九三二年には反戦の素材を過去に求め、「明治の戦争文学」について論がたのも、前年の九月に起った全面戦争の前ぶれである 満州 事変にたのも、前年の九月に起った全面戦争の前ぶれである 満州 事変にたのも、前年の九月に起った全面戦争の前ぶれである 満州 事変にたのを、重大な危機と感じながらも、直接に大陸侵略を扱うことを彼にあえて避けさせた結果であると言ってさしつかえないだろう。満州事変には反戦の素材を過去に求め、「明治の戦争文学」について論との発展」を書いたのはその証左でもある。さらに言えば、一九三学の発展」を書いたのはその証左でもある。さらに言えば、一九三学の発展」を書いたのはその証左でもある。さらに言えば、一九三学の発展」を書いたのはその証左でもある。さらに言えば、一九三学の発展」を書いたのはそのであったが――

反戦文学は「平時」?にこそ書かれなければならなかったのだ。 しい タリヤ文学運動の高揚期において結実しなければならなかったのである。このことは断じて人民戦線運動の時点でのみ論議されるのである。このことは断じて人民戦線運動の時点でのみ論議されるのである。このことは断じて人民戦線運動の時点でのみ論議されるがきではない。相次ぐ弾圧の強化の中で、優れた書き手を次々に奪われたこの時期は、プロレタリヤ文学史上まさしく運動の頂点にあたっており、反戦文学も又この機を逸しては後に書き得なかったあたっており、反戦文学も又この機を逸しては後に書き得なかったあたっており、反戦文学も又この機を逸しては後に書き得なかったのだ。 反戦文学は「平時」?にこそ書かれなければならなかったのだ。

では、なぜあれほどの運動高揚期に反戦文学が組織的に書かれな

かったのか。

プが、 敵の実体、及び現実の社会的力関係の誤認をも認めなければならな 衛だけの独走に終ったことを思えば、運動の未熟さとともに、 緊張した場面も部分的には展開したにちがいないが、運動が一部前 間違いなく約束したであろう。そしてその変革は幾多の困難を伴な ことが推測できる。 せるほど、「反戦」 いだろう。したがってプロレタリヤ作家が、明日に迫る(と思われ ほど、当時の社会情勢の一面には、そのような幻想が浮かぶほどの は、彼等がそういう見通しをもっていたからにほかならない。なる いながらも、主観的にはやがて達成されるはずであったのだ。ナッ にちがいない。たしかに革命の成功は十分にそれを約束する、 含めて一切の人間悪・社会悪の根源を断絶できると考えていたから こそが急務でプロレタリアートの階級的勝利は、 それは、共産主義芸術の確立を目指す戦旗派が、社会体制の変革 革命のために、より高い階級的観点を獲得しようとあせればあ 反戦をストライキや小作争議に優先すると考えなかったこと は当面の目標・急務からはずれていったという ファッシズムをも 階級 いや

義的分割のための血戦の準備をしている」と告げている。そしてそれ、なぜにその左翼文芸家総連合を自然消滅に導いたのだろうか。
 二七年テーゼはその冒頭で「日本帝国主義と戦争」をとりあげ、は、なぜにその左翼文芸家総連合を自然消滅に導いたのだろうか。
 立とからきたのだろう。ひとたびは二七年テーゼの線に沿って左翼どこからきたのだろう。ひとたびは二七年テーゼの線に沿って左翼どこからきたのだろう。ひとたびは二七年テーゼの線に沿って左翼というされば、ナップ指導者たちのそういう誤った情況判断と方針は一体では、ナップ指導者たちのそういう誤った情況判断と方針は一体

続けて次のような要請を掲げた。まさしく誤りのない結果をやがてもたらした。が、コミンテルンはの前段階は「支那に対する日本の干渉」であると規定する。これはの前段階は「支那に対する日本の干渉」であると規定する。

代役となり得ない以上、つまり、二者は性格のちがう二つの団体で 闘争 二、支那革命から手をひけ! 三、ソビエート おいては、ナップこそがそれを行なわねばらぬ唯一の文学運動体で を主張することは可能であった。否、むしろ、総連合解散の時点に に限って考えれば、つぶされた総連合に代って、 は、総連合の消滅は明らかにまちがいであった。 あり、それはそれぞれに存立させねばならない運動体であるからに た。然し、問題はここから先である。なぜなら、ナップが総連合の 直後に結成された「ナップ」も、当時の情況からは必然で もあ れた。ここまでは正しかった。いや、もう一歩進めて、三・一五 ガンを発しなければならぬ―― そして、「戦争に対する戦争」の記念碑的な反戦への結集がなさ 植民地の完全な独立(以下十三項まで略、二七テーゼ) -日本共産党は次のごとき行動綱領を提出し、次のごときスロ 帝国主義戦争の危機に対する だが、 ナップがそのこと 連邦の擁 問題を反戦

江口渙の報告にもとずいて可決している。

「とこうであったかどうか、「戦争反対に関する件」をのことに気づいたのであったかどうか、「戦争反対に関する件」を
・・・プは成立の翌年、組織のくみかえを行なった際、はたしてそ

あったのだ。

践に移されることなしに終った。たしかに、ナップは反戦の必要をこれは当然すぎるほど当然な決定である。しかし、決議は遂に実作集の刊行 (二)戦争反対のための我々のあらゆる技術提供。(一)戦争反対のための各種のリーフレット・パンフレット・創

だろう。 か理解把握されていなかったというそしりを免れることはできない営為として結晶しないからには、やはり反戦が観念的・一般的にし「戦争に対する戦争」以後にも感じていたのだ。が、それが文学的

な最後の機会をも、ここで無為に失なってしまったのである。なぜな最後の機会をも、ここで無為に失なってしまったのである。なぜかくしてナップは、総連合解散という誤謬に続いて、反戦の有効

争議 も、ただ典型的なブルジョア国家にある軍部という一般的規定の範部すなわち天皇制官僚中の最も反動的な最も攻撃的な部分に対して同時に作家同盟の弱点・誤謬となったにちがいない。つまり、「軍 こそ、 戦争と軍事的警察的天皇制に対する政治闘争の軌道に向けること」 点となり、反戦・反軍は単なる決議の域にとどまったに反し、労働 囲を出なかった」(三二テーゼ、傍点引用者)共産党及びコミンテ うことが不充分であった」(三二テーゼ)当時の共産党の欠陥は、 密着に努めたことも事実である。しかしながら、いや、それだから ろうと努力したことはたしかだし、作家同盟も又、その共産党との を要請した時には、文学運動にとって、もはやそれは遅きに過ぎて 貧民の最も広汎な大衆の不満と抗議と闘争の一切の現われを巧みに れたといえよう。そして、三二年テーゼが ルンの誤った分析による現実認識の過誤は、 たのである。 コ ミンテルンの一支部であった日本共産党が、テーゼに忠実であ ・小作争議に比重が一方的にかかって主客のバランスが失なわ 「勤労大衆の主要敵たる天皇制に反対して力を集中するとい 「労働者農民および都市 そのまま作家同盟の観

天皇制に対する過少評価は、侵略戦争に対する積極的にして一義

る。 という彼等の安直な確信は、 ちがいない。しかしながら、 的な取組みの必要を、 であろう。文学と政治という古くて新しい命題の解答がここに見事 性の欠落として、 機を、党及び作家同盟に軽視させる大きなモメントとして働いたに に転化させ得たソビエト革命の成功が、日本帝国主義侵略戦争の危 た一つの結果がここに象徴的に現出していることだけはたしかであ か。が、とにかく、文学を政治のプログラムに無条件的に従属させ に現われていると考えるのは、はたして早計でありひが目であろう 第一次世界大戦を、 文学者の場合特に銘記し批判しなければならない 安易な観念的な対処に変ぜしめた。 労働者農民の勝利に終る内戦へ積極的 コミンテルンへの盲従に終始した主体 たとえ戦争が起っても内乱へ導き得る それ は

れば、 ではないが。 とは自明であろう。 てしまった人々のそれが、何ほどの力をももち得ないものであるこ たが、一方この国の中国に対する全面侵略が、僅か二年の差ではあ 体的に感知したからにほかならない。 社会変革の不可能を知った人々が、侵略戦争を直接の脅威として主 の文学と政治との関係と決して無縁ではなく、 間からも、 るが欧州における第二次大戦開始に先立っていたことを思い合わせ における人民戦線運動の提唱に呼応するという一面をも有しては れてきた段階に至って、プロレタリヤ文学陣営内からも転向作家の まもなく、 時は既に遅すぎたと言えるし、 反ファシズムの必要が叫ばれるにいたったことは、 運動が崩壊のきざしをみせはじめ、 むろん、 人民戦線的な反戦運動を不要というの 叉 むろんそのことはヨーロッパ もはや文学運 革命の幻影が 転向 現象があら 動を解体し え

黒島伝治とてそれは決して例外ではない。 分だし、 が可能であったのである。「戦争に対する戦争」の執筆参加者が、 たちの目的意識として、彼等の文学の主要な主題・素材となること 社会民主主義者やアナーキストや小市民作家を含めた雑多な文学者 目標に掲げなかったことと表裏の関係であり、それ故にこそ反戦は えられていなかったからである。 はコミニズムがまだ明確な思想としてプロレタリヤ文学者たちに捉 ち向かわねばならなかったのである。「武装せる市街」は、 の反戦作家が自らの手で反戦文学の方法を探り出すという困難に立 いプロレタリヤ文学運動の中で、それは傍流的な存在となり、少数 めるや、 このことは理解できる。つまり、 の群」における厭戦的な不明確な思想傾向を例にとっても、容易に 面においてはたしかに皮肉な現象でもあったと言えよう。むろん、 て全体的な共通の、 各派混合の多彩な顔ぶれをみせていることはこの事情を物語るに十 に所属はしていたが、そういう黒島の孤立的な営為の中から生まれ ップ結成によってプロレタリヤ文学が急速に革命コースを疾走し始 15 別の意味での文学的痛苦がそこには存在していた。 作品であり、 反戦文学が、ナップ結成以前により多く書かれているとは前に述 未だ党的視点からの文学創造を営むまでには至らず、後に、ナ の欠陥も、 生まれるには生まれるべき理由・条件が存在してい また、それだからこそ、反戦という目標はこの時点におい 反戦はかえって後退し、二七年テーゼの域を出ることのな その一端はこの辺に起因するものと考えられるが、 蔵原の理論を手本とした小林多喜二とは比較になら 流派を越えた旗印になり得たのでもあるが、 ちょうどそれは、ナップが反戦を 黒島を含めて、反戦作家のすべて 彼の代表作「渦巻ける鳥 「武装せる市 ナップ

に終末を迎えねばならなかった。ともあれ反戦文学は、プロレタリヤ文学の中心としての開花をみず

結果をもたらしたというべきであろう。(一九六六・一二・二〇)く跛行的に発展し、その故にこそ、又自らの生命の閉塞をも早めるてず、立野信之・越中谷利一その他の反戦作家をも育成することなは発表の限りではなかったのだ。プロレタリヤ文学運動は黒島を育た。十五年戦争に突入した後においてでは、日本的情況下でそれら反戦文学は黒島の言う如く、戦争開始以前において必要であっ